

各地域において社会生活を営み、経済活動に従事する主体者としての人間を集団としてとらえる人口とその変動が、その地域の歴史的発展段階において、どのような特徴を示すかは歴史地理学研究の中でもきわめて基礎的な重要な地位をしめると考えられる。

人口変動の研究において、その基本である出生、死亡といった人口再生産の研究、その史的変遷、それらと年齢構造との関係に関する研究は、一七世紀半ばの重商主義下の政治算術以来の歴史をもっている。しかるに、これら三世紀にわたる研究の発達に比べて、人口変動と社会的、経済的諸条件との関係に関する研究はまだ著しく遅れている。また、人口の再生産を中心とする変動自体の研究においても、関連資料の不備の故に、とくに産業化の初期段階についての通説——多産多死から少産少死への人口転換——についても再検討が迫られている。まして、それらの人口変動の社会的、経済的諸条件との関連に関しては、きわめて多くの部分は資料の発掘によって今後の研究に期待せざるを得ない。

人口変動と、社会的、経済的諸条件との関連が、グローバルにみれば、各国の歴史的条件によって特徴を異にしているが、とくに、日本のように、地域的特性の複雑な場合には、各地域についての人口変動や、とくに地域の経済活動を担当する労働力人口の変動に関しては、各地域のミクロ的な研究がきわめて重要である。

以上のような意義にかえりみて、すでに社会経済史学、人口学において、人口の歴史的研究に関する共同研究

が進められているが、本学会においても、人口、労働力の歴史地理が第一四回大会の共同課題として採用されたことの意義は重要である。この大会における研究発表を中心として集録した本紀要は、ミクロ的な貴重な研究が少なくないが、そうした小地域の研究の集積によってこそ、複雑な地域を含む日本の人口、労働力の本格的な歴史地理学的研究が集大成していくことを期待したい。

人口研究者が数少ない日本にあっては、とくに戦後の急激な人口変動とその将来に注目するあまり、人口学の立場からの歴史人口の研究はきわめて少ない。しかし、欧米学界の歴史人口研究、とくに産業化初期に関する研究が再認識されるに対応して研究の気運が醸成されつつある。さらに留意すべきは、人口の都市集中は明治中期に開始されたとはいえ、戦後とくに昭和三十年代後半からの地域人口の変動は過密と過疎の両極的な諸問題や、地域開発にともなう生活環境の悪化など、現実に重要な諸課題を生じつつある。こうした実践的な課題に対しても、地域人口の歴史地理学的研究が、地域住民の生活の史的变化を明らかにすることによって、その発展動向の認識の基礎的指針とすべきことの重要性を強調せねばならない。

いずれにせよ、人口ないしは労働力人口に関する研究分野はきわめて広く、歴史地理学研究においても、社会経済史学、地理学、人口学など関連諸科学との共同研究が進展することを、この際強く要望したい。

一九七二年一月

上 田 正 夫